

## 祖父と、これからも

青森県青森市立東中学校

三年 高畑 凜久

小学生から野球を始めた私は、中学生になって、迷わず野球部に入りました。小学生の頃は、あまり勝つことができなかったのですが、中学生では「優勝する」と心に決め、私の挑戦が始まりました。

二年生の秋になり、私は念願のレギュラーになりました。力のある、素晴らしい先輩たちに恵まれました。「インダカップ」という大会で、決勝戦まで進みました。4点差を見事に逆転し、人生で初めての「優勝」を手にすることができました。

しかし、その後の地区大会では2位や3位という結果に終わり、勝ち続けることの難しさを実感し始めていました。また、ピッチャーを任せられることも増え、責任やプレッシャーに押しつぶされそうでも、弱気になることはありませんでした。

そんな私を見て、祖父がある日、グローブを買ってくれました。それは、「野球を人一倍努力する」という約束で買ってくれたものでした。

私は、そのグローブが嬉しくて、毎日オイルを塗って手入れをしました。その大切なグローブを使って大会に臨みました。

しかし、準決勝、決勝と駒を進めたものの、大事なところで自分がエラーをしてしまい、負けてしま

いました。そして、大会後、エラーの原因は、グローブが新しいからだと言われてしまったのです。

でも私は、祖父に「人一倍努力する」という約束で買ってもらったそのグローブを、使わないわけにはいきませんでした。なぜなら、祖父は癌を患っていて、私の試合を見に来ることができず、その代わりに、思いをすべてグローブに込めていたからです。自分が見に行けない分、グローブがお守りのような存在になって、孫の私が頑張ってくれることを、そして、良い結果を出してくれることを望んでいたと思うからです。

そこで、二年生の冬、徹底して努力することに決めました。守備も、バッティングも、ピッチングも、必死にやりました。放課後、帰宅してからも、自主的に走りこみをしました。

なぜなら、自分を鍛えて自信をつけ、三年生になった春からの大会で、再び「優勝」を手にしたと考えたからです。そして、必ず勝って、グローブのせいで負けたと、みんなに言われたくない、勝って祖父を喜ばせたい、と考えたのです。試合に見に来られない祖父のために、そのグローブと一緒に、試合で必ず勝つ、そう決心しました。

グローブは、使い込んでいくうちに柔らかくなり、私の手になじむようになりました。そんなとき、県大会に出るような強豪チームが集まる大会に招待されました。たった一つのエラーでチームが負けしてしまう、それを思い出すと、とてつもない緊張を感じました。

しかし、試合になり、グローブをはめると、祖父がそばにいて見守ってくれているような気がして、不思議と緊張がほぐれたのです。結果は三位でしたが、エラーすることはなく、とりづらいボールもグローブでしっかりキャッチでき、いつのまにか自分

の体の一部のような存在になりました。

夏になり、いよいよ最後の中体連、というころ、祖父はついに力尽き、亡くなってしまいました。「優勝」というプレゼントを報告する前に。きっと、楽しみにしていたはずなのに、そう思うと、悔しくてたまりませんでした。

私は、決心しました。祖父に買ってもらったグローブで、市の大会を優勝する、と。

しかし、市の大会では準優勝、出場できた県大会では、二回戦敗退と、悔しい思いが続いてしまいました。祖父が買ってくれたグローブと一緒に、優勝してみせると思っていたのに、かたじけませんでした。

そんな私たちに、最後の大会が近づいてきました。実は、地区大会とは別の大会で、東北大会への出場が決まっていたのです。ずっと一緒に練習に励んできた、最高の仲間とプレーできるのも、本当にこれが最後の大会です。私は、全力で、今までのすべてを出し切ろうと、再び決心しました。あのグローブと共に。

大会の結果は、なんと「優勝」。言葉に言い表せないくらい最高の結果でした。きっと、祖父も天国から見えてくれたと思います。

今まで、何をやっても長続きせず、努力などしたことのない自分が、こんなに一つのことには必死になれたのは初めてでした。野球が、自分を変えてくれたように思います。そして、それを支えてくれたのは、間違いなく、祖父です。でも、勝負は、まだまだこれから。

「これからも、頑張れ。」

祖父が、そう言っているような気がします。